

## 研究報告

### 書評

#### 『陽明墨宝』

多賀宗隼

#### (一)

本書は陽明文庫現蔵の墨跡のうち名品二百十一点を厳選し、その正確な複製に詳細な解説と釈文とを施したものである。監修には近衛通隆氏が当られ、解説と釈文とは春名好重教授が担当されている。

まづその内容を一覽するに「近衛家歴代」「天皇宸翰」「古筆」「名家消息」「記録文書」「典籍」の六部より成る。第一「近衛家歴代」は第一通から第五十一通に亘る。「御堂関白記」の道長自筆本にはじまって近衛家二十六代の家歴まで。年代でいえば寛弘から明治に及ぶ八五〇年である。第二「天皇宸翰」は第五十二から第七十七までの二十六通。後朱雀天皇から孝明天皇まで五十八代約八百年間となるが、内二十五通が鎌倉時代後鳥羽天皇以後の宸翰である。第三「古筆」は第七十八から第四百四十九通まで。聖武天皇御筆と伝える「大聖武」のいにしえから室町時代に及ぶ七十二通。多く断簡で自然、筆者不詳のもの、それだけに筆跡そのものに評価の集中しているものが目を惹く。第四「名家消息」は第五百十から第九十一通までの四十二通であるが、これは第三とは対照的にその名が明かであることが喜ばしい。近衛家の家司平信範の日記人車記

の裏書に残った鎌倉時代の消息から江戸時代初期寛永・正保あたりまでの五百年のものを含む。その大部分はもとより公家のものであるが、後期のものには、有力な武家からの消息も含まれており、近世に於ける近衛家の新しい社会的関係と動向とを反映するものがある。第五「記録・文書」篇は第九十二から第二百三までの十二通で、日記などの記録の部分、乃至は宣旨・表文等の短文をその内容とする。九条師輔の「九曆」の古写本にはじまり、近衛家第二代の家実の摂政初度上表まで、二百五十年ほどの年代幅をもっている。最後に第六「典籍」の第二百四から第二百十一の八通は楽書・和歌集・源氏物語などの蔵書につき、その一部分を示しており、即ち、平安時代乃至鎌倉時代の典籍の中から名筆を拮拾したものであって、なお、文庫の秘蔵所蔵の状を想わせるものである。

この図版二百十一点のうちとくに華麗なもの三十八点を原色版、他は単色版とし、<sup>36.4</sup><sup>51.4</sup> 36.×51. ㎝の大きな版型を用いて原本の大きさのままに示すよう配慮されている。近衛家歴代をはじめとする諸の名蹟や宸翰などの名品の鮮麗な複製は、一枚一枚見る者の眼を奪うものがあるとともに、右の六部が一部ごとに時代順に排列されているので、書の歴史的変遷の流、諸流派の生じた所以も彷彿として看取される思いに駆られる。私は書の美しさを適切に表現する力をもたぬことを憾むのであるが、気品の高さと温雅暢達な筆とが公家の書の伝統として貫流しているように思われ、それとともに、それが生れるまでの過程も実例で示されている如くである。消息などの示している、日常生活の匆忙と実用とから生れた文字と、すでに集積された多くの書跡の中から、評価・鑑賞の為に選出されたものとを相対照して見ることの出来るのは、その最も顕著な一例とされよう。ともかくも、この複製は一枚ごとに味わう外にまた二枚或はそれ以上を彼此相ならべ比較対照することも出来、いわゆる手鑑類とは異なる自由さと便利さとを兼ねている。一口にいえば文庫のもつ最優の名品がかくも大量に自由に、

坐ながらにして研究・鑑賞出来るように開放された事に、先づ感謝と喜びの意を表したい。

## (二)

二百十一頁に及ぶ別冊は解説と釈文とに分れている。初めに、七頁をさいて陽明文庫についての春名教授の解説が要をつくしているので、今の必要の限りでここに少しくなぞっておくことを許して頂くこととする。

近衛家は平安朝最後の関白忠通の長男基実に始まる。その邸第近衛殿は近衛大路の北、室町通りの東に在り、左近衛府に近い大内裏の陽明門、一名「近衛の御門」に因んで「陽明殿」といわれた。この基実から家実、兼経と子孫相うけて、陽明文庫を設けた文暦氏まで二十九代に及ぶ。この近衛家は五摂家中の筆頭として栄えた名門中の名門であった。従って謙足・不比等以来の、そしてまた道長頼通以後の摂関家の第一の継承者として自他ともに認めたのである。

この政治的・社会的地位に於て首位を占めた近衛家の歴代は、これに加えて教養が豊かで学芸に長じ、ことに能書としてすぐれていた。このことは不比等以来たしかに徴証を史上に留めている。現存の自筆がそれであるが、なお当時のたしかに記録に残された評言もこれを支えている。就中、代々の墨跡の引つづき数百年の歳月を超えて現存する点に於て近衛家に若くものはない。平安時代の藤原氏の歴代の墨跡の残るものの少い中であつて、道長の日記二十六巻が存し、内十四巻までが自筆である事は驚歎に値する。子孫師実・師通の日記もやや存する。忠通も少しの自筆と当時の高い評価とをのこしている。春名教授は進んで「中世近世の近衛家歴代の真跡は日記・文書・懷紙・短冊・詠草・写本などたくさん残っている。それらの書跡を見るとすべて巧妙にして優秀であり、みんな能書であつたことがわかる」と述べ、且、これを総括して「近衛家の歴代は摂政関白になり太政大臣に任ぜられて廟堂に重きを成し」その家は

公家の頂点に在り、その間おのづから「一千余年の間に蓄積された記録文書は膨大な数量になつてゐる」とのべていられる。墨跡の累積は名筆を生み名筆の伝統は墨跡への趣味と鑑賞眼とを養つた。今日陽明文庫が八点の国宝五十点の重文及びそれに準ずる多くの名品を含めて約二十万点の墨跡を納めてゐるということは近衛家歴代の愛護の精神をよく示している。古くは応仁文明の乱の戦火に備えての洛北への疎開、下つては延宝の内裏炎上の類焼から守つた家臣の必死の活動などが、その一端を示す著例として今に伝えられている。明治以後、種々の経緯を経たのち、昭和十三年、文暦氏による財団法人陽明文庫の設立を見、ここにすべてが一括収納されるとともに従来家門の宝としてのみ伝えた立場から転じてこれを「天下の公宝」とするの趣旨を天下に公表してこの名宝の永遠の伝存の基石をおいたのであつた。一家門の宝が直ちに天下の公宝たり得る名宝のうちから更にその粹を選んだのが即ち「陽明墨宝」なのである。

## (三)

別冊の後半九十四頁が墨跡の解説にあてられる。各頁三段、上段に一一(いちいち)墨跡の縮写を掲げて読者の便を図り、中段にその全文の解説、最下段が内容解説である。解説ははじめにそれぞれの筆者の略伝、今日に残した書跡その書風乃至は流派などを概観した後、上掲の墨跡について極めて詳細周到親切な解説が施される。字形の大・小、字画の疎密、筆力の寛弘と雄健、温雅と俊拔。線の繊細・勁直・洗練・清楚・流麗・暢達。それらの作り出す字と字、漢字と仮名との調和。或は字の配置、紙の余白、行間隔、文字間隔のもたらす効果。筆の運びの遅速、忽卒と刻意の対照。線の肥瘦・自由・奔放と遅滞・凝滞。文字の姿の潤・渴。そしてそれと関連して紙質への注意も促され、十指に余る紙の名も必要に応じて挙げられる。それら全体がまた時代の特徴や流派の傾向の問題とも関連してゆく。一字一劃についての、痒い所に手のとどく様

な、この縦横無礙の説明をここで伝えることは不可能であり、上段の写真に照し合せながらよみ通してゆくことは頗るたやすいことではない。が、その努力ののちに、翻って複製を見直すことの、頗る意義あるを思わざるを得ないのである。

#### (四)

書道は漢字の国に独特な芸術として中国に発生し発展し開花した。長い書道の歴史をもつ国の文化をうけて我国も敢て劣らぬ書道芸術の国としての努力を重ねてきた。しかも我国の場合には、これに加えて独自の仮名書道をつくり上げ、日本の書道芸術は比類のないものとなった。この芸術はしかも最も万人向きで、万人の手近にある点が注目される。それは複雑な道具を必要とせず、しかも字をかく事は本来、日常的・事務的手段であり、そのくりかえしに外ならぬ。この手近の日常生活と實際的必要とがおのづから昇華して芸術となったのである。春名教授が平安時代の一書跡の解説の中に「自由に速く書いて字形にも線にも変化があり、単調でない。このような仮名がふだん普通に用いられ書かれていたのである」とのべられたのも、実用と芸術とのこの関係にふれ、今日名筆と仰がれているものも、或は当年の実用文字そのものに外ならなかったとの指摘とも解せられる。執政の家が期せずして芸術の家ともなった近衛家とその書道の歴史はこの間の微妙な関係を具体的に示す最も代表的な実例にあげられよう。正倉院にも並ぐべき陽明文庫が「陽明墨宝」を公にしたことの文化史的意義はまことに大きいものがあるといふべきである。

(編集財団法人陽明文庫、発行昭和五十七年二月二七日、株式会社淡交社、定価一八〇、〇〇〇円)